AS VISION 2030

愛知淑徳大学 5か年計画（2025～2029）

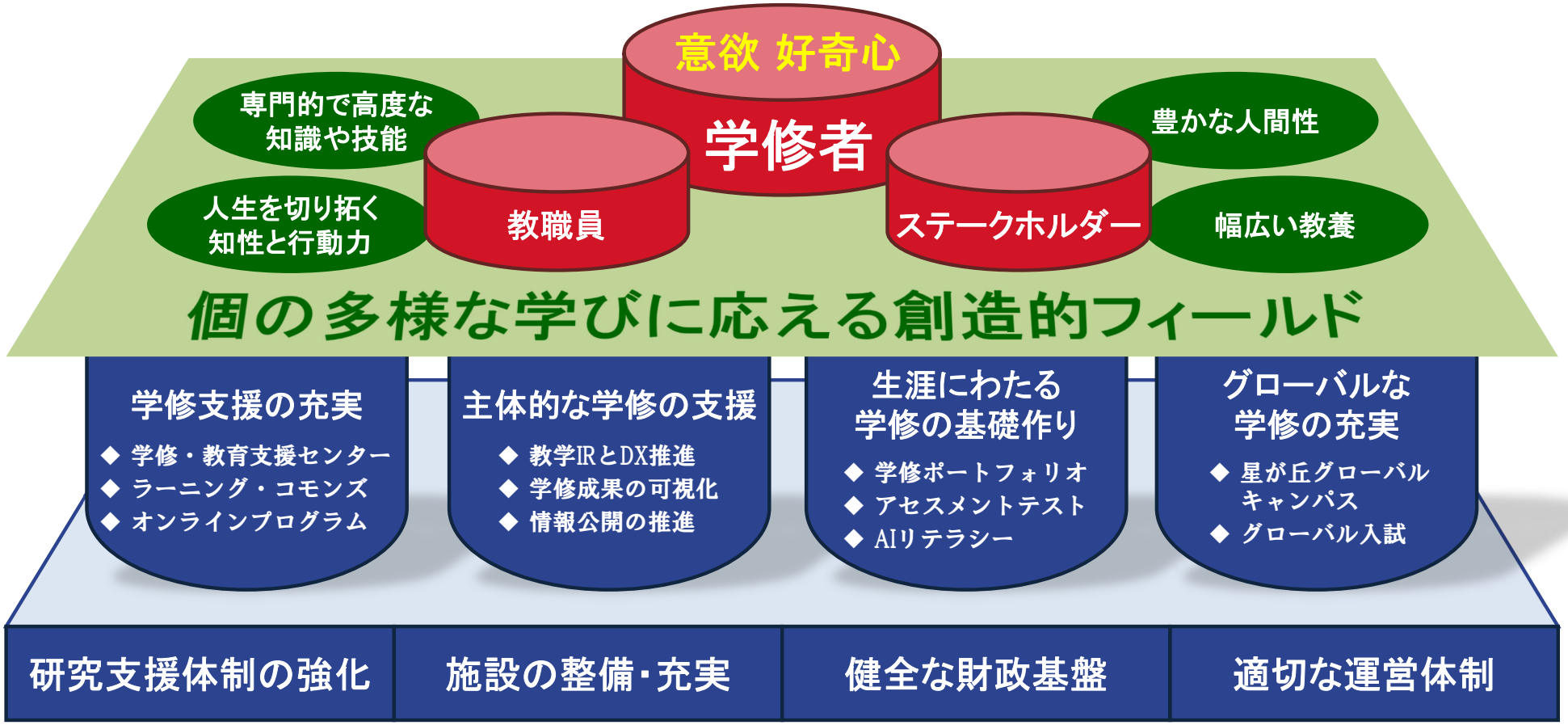
意欲を育み、意欲に応える

個の多様な学びに応える創造的フィールド

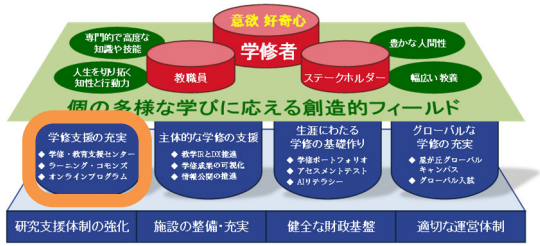
大学は、多様な目標や目的を持った多様な人々が集まり、それぞれの目標・目的を実現するための多様な学び（学修）の場（フィールド）です。そして大学に求められる役割は、こうした学修者個々の多様なニーズに応え、共に学び合う機会を提供し、個々の成長や新しい価値の創造を支援することです。学修によって修得されるべきものは、専門的で高度な知識や技能はもちろん、幅広い教養と豊かな人間性、自らの人生を切り拓いていける知性と行動力であり、これらを修得した人こそが「違いを共に生きる」を社会実践できるのだと考えます。本学は、こうした学修者の多様な学びのニーズに応え、支援し、そして学修者と教職員が共に学ぶ創造的な場でありたいと考えます。

意欲を育み、意欲に応える　ための

4つの柱と4つの基盤



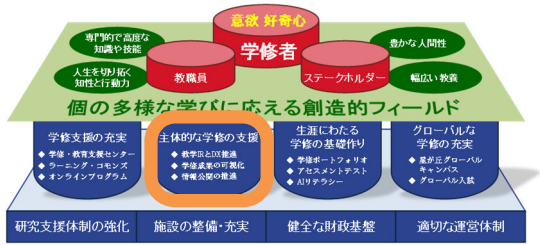
柱① 学修支援組織をさらに充実 多様で主体的な学修フィールドの創造



学修者個々の目標・目的を実現する多様な学修を支えるために、学修支援の組織の充実を図ります。具体的には、ダイバーシティ共生センター、国際交流センター、コミュニティ・コラボレーションセンター、キャリアセンターの連携強化を図り、加えて、入学から卒業までの学修全体を体系的に支援する**「学修・教育支援センター」を新たに設置**します。まず、長久手、星が丘の両キャンパスに**ラーニング・コモンズを設置**し、ライティング・サポートを中核とした支援を行い、段階的に、学修のための情報検索支援や学生の自主的なアクティブ・ラーニングの支援を行う体制を整えます。

さらに、各学問分野の専門性を高め、かつ、学際性の充実を図るために、全学的なカリキュラムの一層の体系化を推進します。加えて、副専攻プログラムの実効化やリメディアル教育、アクティブ・ラーニング、AI、留学生の日本語教育等に対する社会的ニーズに応えるために、**オンラインプログラム等の充実**を図り、学修者の多様なニーズに応えるために、履修の自由度、利便性を高めます。そのために必要なインフラストラクチャーや事務組織を含めた人的資源の充実を段階的に着実に実施します。**全学共通履修科目のうち20%の科目をオンラインでの履修を可能とする**よう早期に整備を行い、5か年でさらなる充実を目指します。

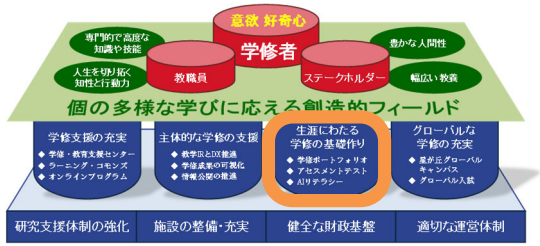
柱② 学修成果の可視化を通じた学修者の主体的な学修フィールドを確立



卒業後の進路、生涯にわたる人生設計の目標に向けて、入学から卒業までの学修目標の設定と達成度の把握を学生が主体的に行えるよう支援します。そのために**教学IR（Institutional Research）の体制と機能の整備・充実**を図ります。教学IR体制の整備、機能の充実のためには、学内の**教学部門のDX（Digital Transformation）化推進**と、教学IR分野を専門とする研究者や専従職員が必須で、それらについても計画的に体制を整えます。また、**学生の在学期間の学修成果を客観的に評価する指標の開発と取得データの情報公開**を推進し、人材育成のフィールドとしての大学の公共性を高めます。

本学の教育の質保証のためのPDCAサイクルに関して、組織やシステムについては概ね整備されてきました。教学IR体制の整備によって得られる客観的かつ詳細なデータに基づきこのサイクルの実効性を高め、具体的かつ実践的に大学の教学運営に活用するための**教学マネジメント体制とシステムをさらに充実**させます。

柱③ 生涯にわたる学修の基礎作りのフィールドの充実と社会連携・貢献の拠点化

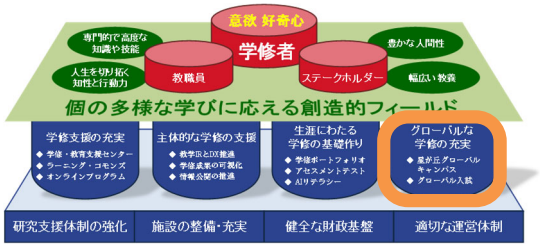


本学のステークホルダーである在学生、卒業生・同窓会、地域との有機的で相互的な連携をさらに発展させ、様々な立場の人々が協働し、様々なデータを活用することで、新たな価値（イノベーションや持続可能な発展）を創生します。社会連携・貢献の分野においても、教学IRの機能を有効に活用できる体制、システムを構築します。

具体的には、まず、**ディプロマ・ポリシーと対応付けた学修成果を学修者自身が常時確認できる学修ポートフォリオ**を完成させ、運用を開始します。続いて、**入学時と進路選択時期にアセスメントテストを実施し、「違いを共に生きる」を中核とした本学の学士力の修得状況を把握するシステムを確立**し運用を開始します。最終的には、卒業生や卒業生の進路先に対する調査を実施し、各教育組織の**ディプロマ・ポリシーの社会通用性について具体的な検証を行う**体制を整えます。

また、AIリテラシーの涵養に資する教育プログラムを策定し、それらの科目を本学の基幹科目の1つと位置づけ、その基礎的な科目については、全学必修科目として2025年度から開講します。今後さらに進展する社会のDX化に対応し得る学修の場を提供します。

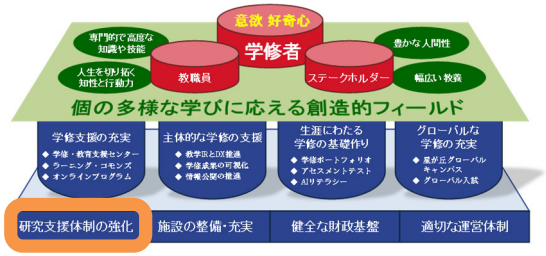
柱④ グローバルな学修フィールドのさらなる充実



星が丘キャンパスのグローバル化を進め、外国人留学生の受け入れ態勢をさらに充実させ、**交換留学生の受け入れ人数をCOVID-19禍以前の水準である40名超、また派遣についても、同様に25名超**を早期に回復し、5か年でさらなる増員を目指します。さらに外国人、外国にルーツを有する学生の受け入れのための新たな入試制度を設け、星が丘キャンパスにおける各学部において実施し、**交流文化学部、ビジネス学部およびグローバル・コミュニケーション学部において、定員の10%を外国からの留学生および外国にルーツを持つ学生を確保する**ことを当面の目標とし、5か年でさらに増員することを目指します。これらの目標を達成するために、ICTを活用した学修効果の高い、効率的で自由度の高いカリキュラムや教育方法を開発・実施します。

基盤①

研究力を向上させる
研究支援体制の強化



学生の多様な学びを支援するためには、大学の研究力を高めることが必須です。近年の学部の新設に伴って、これまでの本学にない領域の研究者が急激に増加していることなどから、競争的資金・受託研究費等の獲得を推進し、学部組織と事務部門との研究連携を図ることも必要となってきます。そのため、現状の研究支援体制の把握と必要な規程等の整備を支援する事務部門の充実を図ります。この5年間で、大学全体としての具体的な数値目標の設定を実現していきます。

基盤②

施設の計画的な整備と充実



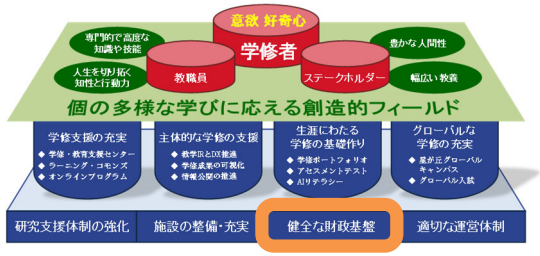
2025年度までに、全学の学修施設においてはWi-Fi環境が整備され、全学的なICT活用の充実が図られてきました。今後も学内DXにおいてAIの活用も含めて、社会や時代の情報環境に対応して計画的な整備を行います。

また、障害者総合支援法に基づき、本学では、障がいのある学生の受け入れを積極的に行ってきています。それらの学生の学修支援や学生生活支援に必要なインフラストラクチャーの整備については、今後も必要に応じて、逐次実施し、障がいのある学生が健常学生と同等の水準で学生生活が送れる環境の維持・整備に努めます。

さらに、上記「4つの柱」の実現のため、年度ごとに学長が内容の必要性、中期計画との関連性、算出根拠の適切性等の視点から整備の採否を決定し、最適な教育研究環境を計画的に整備します。

加えて、両キャンパスの教育研究環境を安心して使用できる状態に保つため、引き続き既存の建物及び構築物等の保守・管理に尽力します。

基盤③ 健全な財政基盤の維持



学校法人を取り巻く環境は、近年における少子化、物価上昇、為替の変動等の影響によって大変厳しい状況にあり、そのなかで大学、中学校及び高等学校の中期計画を実現させるには、長期的に安定した財政基盤が必要です。

ついては、本学園の中期財政計画【2025（令和7）～2029（令和11）年度】を策定し、教育研究水準を維持・向上させていくための安定的な財政基盤の確保を図ります。

財務関係比率に関する指標等は本学園の中期財政計画【2025（令和7）～2029（令和11）年度】のとおりです。

基盤④

高等教育機関としての社会的責任を果たす適切な運営体制の維持



学校法人が、その活動を健全かつ効率的に運営するため、内部統制システム基本方針のもとに定められた内部統制システムを適正に運用します。また、法人運営体制と実際の業務運営に齟齬がないかを適時確認し、必要に応じて改善を行うことで、法人運営におけるコンプライアンス、透明性の確保、さらには運営体制の強化を図ります。

また、大学を取り巻く環境の変化及び業務の高度専門化、多様化に対応するべく、教員については大学設置基準を上回る適正な人員配置を計画していきます。職員については、現状の人員体制を維持しつつ、外部人材を活用し多様な雇用形態を取り入れることにより、柔軟かつ弾力的な組織をめざし、今後も不断の業務改善を継続していきます。